

【特別講演】セルロイドの歴史と産業遺産としての存在意義

The history of celluloid and its significance as an industrial heritage.

松尾和彦(セルロイドハウス横浜館副館長)

Kazuhiko Matsuo (Deputy director of celluloidhouse Yokohama)

セルロイドは 150 年の歴史を誇り日本の代表的産業であり生地においては日本が世界生産の 40%を担い、加工品は 25,000 種以上を生産していた。しかしながら時代の変化とともに忘れ去られようとしている。セルロイドが日本に遺した各種産業遺産を観て改めて意義を問い直したい。

はじめに

セルロイドとは 1868 年にアメリカのジョン・ウイスレイ・ハイアットが発明し 1870 年に特許を取得した世界で最初の合成樹脂である。但しこの手の話には異論が存在することが多くイギリスのアレクサンダー・パークス、同じくイギリスのダニエル・スピルであるとする説もある。



写真 1 ハイアット(左)、写真 2 パークス(中)、写真 3 スピル(右)
何れも『プラスチックの開発物語』より

しかし何れにせよ日本の歴史では江戸時代から明治時代に替わろうとしていた頃に最初の合成樹脂が発明されたことに違いはない。この当時、ビリヤードが流行っていたが球に使うのが象牙であったために毎年 8,000~10,000 頭もの象が殺害されていた。また人間も象三頭に人間二人と言われるほど亡くなっていた。

そのため象牙に替わる材料の発明が急務となり新材料の開発に一万ドルの賞金を懸けられた。

このような形で開発されたセルロイドは当初の目的のビリヤードボールに限らず入れ歯の歯床、コルセットなどにも使われるようになり需要が広がっていった。

1 日本への伝達

日本に伝わったのは比較的早く 1877 年に神戸の外国

人居留地 22 番館にアメリカから 6.6 センチ四方の赤色のセルロイドが伝わったのが最初だとされている。翌年には横浜山手の 28 番館にも伝わったが何れも数量も少なく単発的であったので日本に定着するということにはなかった。



図 1 神戸外国人居留地 22 番館

建物は図の真ん中の少し下にある。南隣にある 15 番館は 1995 年の阪神淡路大震災で倒壊したが、その後再建され現存する唯一の建物となっている。『神戸外国人居留地観光案内』より



写真 4 明治時代の 15 番館(左)

写真 5 現在の 15 番館(右)

何れも『神戸外国人居留地観光案内』より

その後、日本へのセルロイド輸入が行われて加工が

盛んになったこと、日清戦争により主原料の一つである樟腦の大生産地台湾が日本の領土となったことなどから日本国内でのセルロイド生地製造が急務となったが、技術力・資金力不足により満足するような成果は得られなかった。そのため大資本の導入が行われ1908年に大阪堺に堺セルロイド、兵庫県網干に日本セルロイド人造絹糸が設立された。

2 堺セルロイド

1908年に三井家によって堺に設立された堺セルロイドの赤煉瓦棟は長い間、堺の名物であったが近年に取り壊されてしまい現在では一棟しか遺されていない。



写真6 現在遺されている一棟(左)



写真7 稲荷も遺されている(右)

何れもダイセル提供

3.日本セルロイド人造絹糸

兵庫県網干に堺セルロイドと同様に三菱、鈴木商店によって設立された日本セルロイド人造絹糸の建物は網干名物となる。



写真8 煙を吐くボイラー室(左)



写真9 外国人宿舎は後に病院となったが取り壊されて現存しない(右)

何れも『1916年火薬製造記念帳』より



写真10 設立当時の首脳陣。前列中央左手に帽子を持っているのが工場長の厚木勝基。1916年『火薬製造記念帳』より

堺セルロイドと日本セルロイド人造絹糸の二社は、その後第一次世界大戦後の不況により窮地に陥り1919年に両社をはじめとする八社が合併して大日本セルロイド(現ダイセル)となる。



写真11(左)、写真12(右)



現在遺されている二棟の外国人宿舎通称緑と赤。

何れもダイセル提供



写真13 ボイラー室は特高受電設備として現存している(左)



写真14 網干の稲荷(右)、何れもダイセル提供

4. 渋江公園

日本のセルロイド産業において生地製造と並ぶもう一つの柱は歯ブラシ、櫛など25,000種にも及ぶ製造加工業であった。中でも玩具製造業は重要な産業であった。



写真 15 セルロイドハウス横浜館の様々なセルロイド玩具
セルロイドハウス横浜館提供

このセルロイド玩具製造の中心となったのが東京都葛飾区であった。葛飾区はセルロイドの町と自称するほどセルロイド玩具製造が中でも千種稔は敷地 1,000 坪、従業員 1,000 名という中央セルロイド工業株式会社を運営していたが、第一次世界大戦後の長引く不況によって廃業に追い込まれてしまった。この跡地は葛飾区によって買い取られ「葛飾区セルロイド工業発祥の地」の記念碑が立てられている。



写真 16 千草稔(左)、写真 17 渋谷公園の記念碑(右)
何れも『硝化綿工業会 40 年誌』より

5.大阪セルロイド会館

東京地区における玩具製造と並んでセルロイド加工業の大事な柱は大阪地区の櫛・ブラシ産業であった。大阪櫛会館として建設された今里の大阪セルロイド会館は登録有形文化財となり一室にはセルロイド製品を展示している。



写真 19 大阪セルロイド会館。大阪セルロイド会館提供

6 重要文化財

セルロイドには重要文化財となっている物もある。それはセルロイドフィルムで1899年に撮影された9代目市川團十郎、5代目尾上菊五郎による「紅葉狩り」、1910年に撮影された「楠公訣別」、そして同じ年の「小林富次郎葬儀」の三点がある。

小林富次郎は歯ブラシ、歯磨きなどのメーカーとして知られているライオン株式会社の創業者で、葬儀の列は千代田区東神田の小林商店から美土代町の東京基督教会館まで進んでいった。その様子は現在でも遺っている万世橋付近のガード、基督教会館、東京市電などが映されていて当時の世相が伝わる重要なものである。



写真 17 紅葉狩り(左)、写真 18 小林富次郎葬儀(右)
何れも吉澤商店提供

7.岩井薫生

このように重要な産業であったセルロイドも各種プラスチックの登場により忘れ去られようとしていた。そこへ現れたのが岩井薫生である。

岩井は2000年から毎年セミナーを開催しセルロイドに関する各種の講演を行うとともに生地、製品、金型、ポスター、書籍等約 10 万点を収集して横浜に博物館を開設していた。そのセルロイドハウス横浜館は老朽化のために取り壊されたが近年中に埼玉県に新たな施設を開設する予定にしている。



写真 20 岩井薫生(左)



写真 21 セルロイドハウス横浜館内部(右)

何れもセルロイドハウス横浜館提供

8.化学遺産第 009 号

セルロイド及び伴う産業遺産を後世に伝えていく活動を行っていくうちに嬉しい知らせがあった。

2011 年 3 月に「セルロイド工業の発祥を示す建物及び資料」が日本化学会認定化学遺産第 009 号に認定されたのである。

認定されたものは異人館、生産設備などであった。また葛飾区郷土と天文の博物館は 2016 年に「セルロイドの町かつしか」展を開催し、国立東京科学博物館が 2017 年に開催した「日本を変えた 1000 の技術」展の一つにセルロイドが認定されたのである。



写真 22 化学遺産に認定された生産設備(左)



写真 23 化学遺産認定証(右)

何れもダイヤセル提供

おわりに

このようにセルロイド産業は、かつての日本の代表的産業であっただけに数多くの遺産を遺しているし、セルロイドを愛する人も数多い。セルロイド産業を支えてきた人は多くが無名の町工場・家内工場で働いていた人達だった。そして今セルロイドそのものも、かつて携わっていた人達も急速に失われようとしている。

その意味でセルロイド産業文化研究会が発足した 2000 年は、ぎりぎりのタイミングであった。これまでの歴史を積み上げてきた人たちに感謝の意を表すると

ともに、これからも努力を重ねて後世に伝えていきたいものである。

セルロイド加工業者の中でも玩具製造、眼鏡業者は小規模なものが多い。

東京都葛飾区はセルロイドの町と自称しているようにセルロイド玩具業者が多かったが、写真にあるようなところは何人もの職人が働いているので比較的大規模なものである。

眼鏡業者も多くは小規模零細業者である。福井県鯖江市は眼鏡の町として知られている。この地方の方言で「おしよりん」という言葉がある。おしよりんとは冬になって田畑を覆う道に雪が硬く凍ると真っ直ぐに進むことが出来るということで、転じて寄り道せずに真っ直ぐに進むこと(人)という意味で親や先生は子供たちに「おしよりんで帰りなさいよ」、「おしよりんに生きなさいよ」などと言う。

藤岡陽子が発表した同名の小説は 2023 年秋に映画化もされている。

鯖江の眼鏡業者は写真にあるような「おしよりん」な人々であった。



写真 24 玩具を作る町工場(左)、『セルロイドの町かつしか』より

写真 25 眼鏡を作る家内工場(右)、鯖江眼鏡ミュージアム提供